

研修員報告 〈フェンシング 岡崎 直人〉



平成18年度・短期派遣（フェンシング）



I. 研修題目

トレーニング方法全般の習得およびマネジメント

II. 研修期間

2006年11月20日～2007年11月19日

III. 研修地及び日程

(1) 主な研修先

C.N.F.E. / C.R.E.P.S. (Centre National de Formation à l'escrime)

(2) 受け入れ関係者

- ・フランスフェンシング協会
- ・ALBIN SIRVEN (フランスフェンシング協会役員)

(3) 研修日程

通常研修 週5日 研修所による指導者養成授業
授業要領

曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1時限 8:00～10:30	Epée	Fleuret	Epée	Epée	Fleuret
2時限 10:30～12:00	Sabre	Pédagogie collective	Fleuret	Sabre	Pédagogie collective
3時限 14:00～15:30	-Epée -Fleuret -Sabre	Pédagogie Collective Expérimentale	Technique de L'écrit et oral	Assaut Et Arbitrage	Sabre

IV. 講習内容について

(1) 通常研修

① 研修前の準備（ビザ取得について）

フランスでの研修に当たっては、1年間滞在するための滞在許可証を取得しなければならず、研究者ビザ取得の準備を行っていたが、在日フランス大使館にて研究者ビザが発行される直前、受け入れ先機関が研究者ビザを発行するに値しないという理由から、査証の発券を取り消され、急遽ビクターという査証に変更という形になった。

また、現地ではその査証から、滞在許可証を発行してもらいはじめて、1年間フランスに滞在することができるが、そのためにも現地にて、以下のものが必要になった。

- ・受け入れ先機関の証明書
- ・住居の証明書
- ・公共料金の支払い明細書
- ・預金通帳のコピー
- ・滞在中の給与等支払い機関の証明書（仏語）
- ・胸部X線写真、戸籍謄本（仏語）

基本的にアルバイト等の金銭を受け取る仕事をする事ができないビジターは、滞在期間中に金銭に困ることがないという証明書さえあれば、発券までそれほど苦勞することはないが、受付場所と発行される場所が違う所だったり、受付される相手によっては、何度もやり直しを強いられたりすることがあり、苦勞を強いられる場合がある。

私の場合、受け入れ先機関へその場で電話をつなげられそこへ通っているかどうかの確認まで行っていた。

また、戸籍謄本や給料発給書などは英語表記のものを持ちこんだが、すべてフランス語表記のものでないと受け付けてもらえず、急遽、現地の専門の場所にて、翻訳証明付きの翻訳をお願いした。

②受け入れ先機関（C.N.F.E.）での研修について

私の受け入れ先として迎え入れていただいた機関はC.N.F.E.というフランス国内において、フェンシングの指導者を育成させる専門学校に近いもので、年によってその受け入れ方が異なるが、本年（2007～2008年）は9ヶ月間平日休みなく受講する形式だった。

その中で、火曜日2時限に、実際に小学生低学年の子供を指導し（約1時間）その後、指導内容について話し合いを行う。

フランス国内では、小学校の授業として、フェンシングを取り上げている学校も多く、その時間は学校の先生とフェンシングのコーチ資格者が話し合って授業内容を決め、スケジュールを組む。また、同じく火曜日の3時限はパソコンを使ってフェンシングに関するもの（例：試合用プログラム、カレンダーなど）を作成し、水曜日の3時限は座学によるフェンシングの研究を行う。コーチ資格者は試合の運営等についても知識を有していなければならないことから、受講者は熱心に取り組んでいた。

その他の時間は、それぞれの種目時間が振り分けられており、各種目の担当講師が指導にあたる。基本的には、その時間の課題（例：アタックサンプル、プレパレーション、コントラアタック、コントラリポストなど）に



写真1 子供たちにサーブルを教える様子

そして、どのように指導すれば良いのかを習う。約1時間、個人レッスン方式、または団体練習でお互いを指導し合い、その後、問題点を話し合う。いくつか課題を終了するとその中から、任意に選んだ課題を出されて、テスト形式でデモンストレーションを行う場合もある（実際に点数をつけられる）。また、団体レッスンの形式をとる場合もあり、この際には一人が代表となり、皆を指導するテスト形式で行われる。



写真2 指導の様子

6週間の内1週間は、同じ研修を修了し、次の段階へ進んでいる指導者が受講者を指導し、指導内容について話し合う形式での講習を行う。



写真3 施設内の寮

これらの講習では、活発な意見交換が行われ、問題点があれば、指導したものはどのような意図でそれを行ったかを答えなければならない。あるときには、担当講師から答えを迫られ、涙ながらも回答をしていた受講者もいた。

通常講習は15時半に終了し、その後1～2時間は意見の交換、フリーでの練習、図書館へ行くなど各自自由に行動をし、夜はそれぞれの所属するフェンシングクラブで練習・指導を22時頃まで行う。

また、C.R.E.P.Sは寮を備えており、研修受講者は希望により寮に宿泊する事ができる。寮は一人または二人部屋で二部屋に一つのシャワーとトイレがあり、3食付。研修受講者は有料だが、同じ場所で練習をしている、選抜されたフランス選手（女子サーブル、フルーレナショナルチームレベル、男子フルーレジュニアナショナルチームレベル各4名）たちは全額国からの補助にて、宿泊している。

③指導者試験（BE1）

検定試験はフランスフェンシング協会の各支部より試験管が立会い、筆記論文、口頭面接、ペタコジック・コレクティブ（3種目+小学生）個人レッスン（3種目）を行い、実技力、理解力、指導力がテストされ、合否が確定する（合格しなかった項目は、翌年再び受講する）。検定結果は、試験終了約1週間後に本人の家に郵送されるが、受験者の多くは既に各フェンシングクラブと契約をしており、検定結果の出る前からクラブで指導を始めるが、合否の結果によってはクラブを変える指導者もいる。

④ナショナルチーム等有望選手の練習について

私が通っていたC.R.E.P.S.では、女子サーブル・フルーレ、ジュニア・カデ男子



フルーレのナショナルチームが練習を行っていたが、その中ではジュニア・カデ男子フルーレの練習に参加することができた。

ナショナルチームは年間の試合結果と9月初旬に開催される国内大会の結果を基準に選考され、希望者のうち上位4名までがC.R.E.P.S.内にある寮にて全額補助にて、練習に打ち込むことができる。

練習は2名のコーチが上位4名の選手を中心に、ジュニア選手8名、カデ選手8名の16名のスケジュールを組み、週2回3時間の合同練習とコーチとの1対1のレッスンが中心となる。また、選手はそれぞれクラブチームにも所属しており、夜にはクラブチームでも練習を行っている。



写真4 ペタゴシク・コレクティブ (小学生の部) 試験中の様子

⑤クラブチームについて

フランス国内では、フェンシングがとても盛んなことから、パリ市内にも多くのフェンシングクラブがある。大きなクラブでは、フルーレ、エペ、サーブルの3種目を指導しているが、そういったクラブはまれで、多くのクラブは1種目、または2種目を指導している。15時～18時までは小学生くらいの年齢を対象とした練習時間で、その後、一般の練習時間となる。

小学生の練習では、子どもたち皆が楽しめるように練習方法を工夫している指導者が多く、運動能力を高めながらフェンシングの技術を学んでいくよう指導をしている。また、一般を対象とした練習では、指導者により様々な指導方法をとっているが基本的に、選手は好きな時間にクラブに来て選手同士で試合形式の練習を行い、指導者は選手に合わせて個人レッスンを行っている。

その中でも、まだ創立2年目のPUCというクラブは、フランスナショナルチームのコーチが3名所属しており、練習場所もパリ市内に2カ所持っている大きなクラブである。私はそのクラブで、見学と練習をすることができた。

フランス国内のクラブチームではそれぞれにクラブの指導方針があり、PUCでは、若い選手を中心に運営をおこない、勝つための技術を中心に指導を行っている。趣味としてのフェンシングクラブも多い中、少し厳しくてもこのクラブに所属したいと言う選手も多くいた。



写真5 クラブチームでの練習



（2）特別研修

①アーティスティックフェンシング

アーティスティックフェンシングとして、昔から受け継がれている手法や映画の撮影などで使用されるフェンシングの動作を実際の振り付け師の方を呼んで、講習を受けた。2本の剣を使用しての立ち回りなど、普通と全く違った動きに戸惑いながらも、大きく見栄えの良い動きや、スムーズな剣さばきなど、映画の格闘シーンのように、作られているのを学んだ。



写真6 二刀流による剣さばき

フランス国内においてはアーティスティックフェンシングは、歴史も深く人気もあり、クラブによっては週に2～3回アコースティックフェンシングを練習する所もあり、フェンシングをスポーツとしてとらえるだけでなく、古来からの格闘技そして芸術として根付いているヨーロッパ独自の文化となっている。

日本でもフェンシングをメジャーにするためにはこのような振興活動も必要であると実感した。

②ハンデキャップスポーツ

日本国内ではあまり、触れる事ができないが、フランスでは、ハンデキャップスポーツのフェンシング指導者もこの研修生の中から、選ばれることから2週間の集中講義にて、ハンデキャップスポーツでの指導の仕方を学んだ。



写真7 試合用の道具を使用して、個人レッスンの仕方を練習

足が使えず、間合いを体感で作り出すため、普通のフェンシングとは違った技が多く、それにそった指導方法がある事を実感する事ができた。

③エコール・ド・ポーリテクニクへの指導研修

研修生は試験を受けた後、すぐに各クラブチームで指導を開始することから、実際に現役選手に対しての指導方法を学ぶため、防衛大学校（l'Ecole polytechnique）にて、実際のフェンシングを習っている選手に指導をおこなった。

選手は初級から中級レベルのため今までやってきた基本を中心にエペ、サーブル種目を各受講者にそれぞれ一人ずつを指導し、終了時に技術的にそれほど高くない選手に対してどう指導するかを議題に全員にてディスカッションを行った。

④マラソンミニム パリ国際大会

2月に、パリ市内においてミニム選手の大会が行われ、日本からも多数の選手が参加した。

この大会は普通の試合方式と違い、若い選手にできるだけ多くの試合を経験させ、国際的なフェンシングレベルを感じてもらおうという趣旨で進められており、通常の倍以上の試合数が行われる。



写真8 防衛大学校の選手に指導を行う様子

⑤その他特別研修

フルレグランプリ パリ国際大会

2月26～28日

エベグランプリ パリ国際大会

5月11日～13日

世界選手権大会 (ロシア サンクトペテルズブルク)

9月28日～10月12日



写真9 ミニム大会では公平期するため半数以上の審判がドイツ人

(3) 研修後

今回の研修を終え、私の今後の方向としては、フェンシングにおける指導方法の統一性を課題としなければならないと痛感した。現在フェンシング競技の国内の指導者は、自分自身が受けた指導と自分の経験をもとに指導を組み立てているため、指導に統一性がなく、指導を受ける選手たちは指導者がかわるたびにその指導方法に合わせた技術をつけなければならない。また、競技中の指示についても、一方の指導者が良いと言って選手が行った事をまったく否定してしまうような指示をだしてしまうこともあり、選手はどの指示を信じてよいのか、疑問を抱いてしまう事が見受けられる。

フランスにおいては、今回の研修のように基本的な指導方法には統一性があり、それに従い、指導者が学んでいることから、一貫した指導方法が確立されており、指導者の指導方法に大きな隔たりはあまりなく、そのぶん、指導者への不信感もあまりない。

(4) 終わりに

最後に1年間、日本オリンピック委員会のサポートのお陰でフランスでの研修を充実したものにすることができました。今後は、この研修中にできた、コネクションを有意義に使い日本のスポーツ界そして、フェンシング競技の為に尽くしていきたいと思えます。ありがとうございました。